

吉井勇の軌跡

年号 年齢 できごと

昭和	大正	明治
35	11	39
32	10	38
30	4	33
25	43	19
23	42	1
22	41	
16	40	
13	39	
12	38	
10	37	
9	36	
8	30	
6	25	
15	24	
	23	
	22	
	21	
	20	
	15	
	1	

10月8日、東京芝区高輪に、吉井伯爵家の幸藏・静子の次男として誕生。祖父の友實は、明治維新の志士として活躍し、坂本龍馬とも縁のある人物。

東京府立第一中学校へ入学。同級に谷崎潤一郎、辰野隆らがいる。

早稲田大学文学部高等科予科に入学するが、経済科に転科した後、退学。新詩社に入社し『明星』に作品を掲載。

新詩社の歌会に出席。『明星』に次々と短歌を発表し、注目される。この頃に高村光太郎、北原白秋や平野万里らと顔馴染みとなる。

森鷗外主催の観潮楼歌会に出席するようになり、7月から8月にかけて与謝野寛（鉄寛）、木下李太郎、北原白秋、平野万里と共に九州各地を旅行し、紀行文『五足の靴』を『東京六新聞』に連載。年末には新詩社を脱退。

観潮楼歌会で上京した石川啄木と出会い親交を深める。

森鷗外監修のもと、平野万里や石川啄木らと『スバル』を創刊。この誌面の中で発表する戯曲『午後三時』が世間から注目を集める。

第一歌集『酒ほがひ』を出版。この頃に自身の祇園での遊びを作品とし、『祇園歌人』として知られるようになる。

『ゴンドラの唄』が、芸術座で上演された劇『その前』の劇中歌として歌われる。この時にも人気を博すが、戦後公開される黒沢明監督の映画『生きる』の中で歌われ、誰もが知る名曲となる。さらに、この年には、後に祇園の歌碑となる『かにかくに祇園は恋し寝るときも枕の下を水のながるる』を収録した『祇園歌集』も出版。

伯爵柳原義光の次女徳子と結婚。

長男滋誕生。後に滋は後楽園スタジアム支配人や日本野球連盟評議員などを務める。

大正

父幸藏の隠居により家督を相続するが、父の事業失敗で負債も負う。さらに、この時期から妻徳子との不和が表面化し、家庭に居づらくなり各地を旅する。文壇からも疎くなり落魄の末をたどり始める。

この時、後に溪鬼荘で隠棲するきっかけとなる伊野部恒吉と出会う。

越後、佐渡、北陸路、丹後路などの各地を旅する。土佐にも再訪し、この時初めて猪野々にあった猪野沢温泉を訪れ、一カ月ほど滞在。この頃から徳子夫人とは別居状態になり、この年の暮れに徳子夫人の『不良華族事件』が明るみとなり、後に離婚。

父の負債や家庭内の問題で傷心し、高知への隠棲を決意。

伊野部恒吉から譲り受けて、猪野々に草庵『溪鬼荘』を構え隠棲。

高知市築屋敷（現上町）に転居。東京から国松孝子を迎えて再婚。

京都市左京区北白川に転居。京都の自然、風物、年中行事に心ひかれていく。

伊野部恒吉死去。報せを受け、直ぐに土佐に赴いて葬儀に参列。

谷崎潤一郎、新村出、川田順らと大宮御所にて昭和天皇と会談。

宮中歌会始の選者となり、以後死去するまで務める。

『都をどり』の歌詞『京洛名所鑑』作成、南座にて上演。（没年まで歌詞製作）

芸術、文化、観光の面で京都の為に尽力した勇を顕彰する意味で、有名芸術家達の発起により京都祇園白川沿いに『かにかくに歌碑』を建立。

地元の観光協会が香北町猪野々に歌碑建立。現在は吉井勇記念館敷地内に移設。

11月19日、肺がんにより死去。青山霊園に埋葬。



▲『五足の靴』九州旅行
後列中央が北原白秋、
2列左から与謝野寛、木下李太郎
前列左から平野万里、吉井勇。



▲第一歌集『酒ほがひ』



▲『ゴンドラの唄』楽譜

不良華族事件

昭和8年に発覚した華族達の不倫事件であり、当時、上流階級の女性たちのスキャンダルとして東京朝日新聞他報道機関が大々的に報じました。

ダンスホール教室の教師を中心に、不倫や賭博を行っていたことが明るみになるのですが、その教師に女性を紹介していたのが吉井勇の妻である徳子でした。この事件により、勇は世間から白い目で見られ、仕事の依頼も無くなり、猪野々での隠棲へとつながります。

かにかくに歌碑

京都白川にある『かにかくに祇園はこひし寝るときも枕の下を水のながるる』の歌碑は吉井勇の古稀を記念に建立されたものです。この歌碑の建立には当時の京都市長や志賀直哉、谷崎潤一郎など錚々たる面々が発起人となりました。『祇園歌人』としてまちの振興に貢献したことが評価されてのことでした。

以降毎年11月8日にはこの歌碑を囲み『かにかくに祭』が盛会に行われています。

